

# 波頭を越えて

竹島リポート

第1部 ①

「日本の陸地は狭いが、海は広い。事業を成すなら海に力説していた」と遠縁にあだ。明治37(1904)年、竹島の領土編入と貸し下げを政府に願った島根県・隠岐の水産家、中井養三郎(1864~1934年)の口癖だった。

隠岐の漁師が以前から度々訪れていた竹島に、中井は36年には滞在用の小屋を建て、など、本格的な事業開始の準備を進めていた。だが、何度も上京して領土編入を熱心に願ったのは、事業のためだ。ではなかったという。「領

## 水産家の挑戦

### 小屋建設、領土編入の根拠

の編入には、我々の先祖が生命をかけて漁労し、護り、愛してきた事実によるどころ大なるものがあります」

◇ 隠岐の人々をひきつけておまなかつた竹島。それは、アフリカなどの海産物と、アシカが豊富に捕れた「豊穡の海」だったからにほかならない。昭和29年5月に竹島での最後の漁に出た八幡尚義(80)は「すごい漁場だった。あれから50年も行けんままになるとは思いませんかった」と振り返る。

中井の生家は鳥取県倉吉。松江市の漢学塾「相長学舎」に学び、塾長を務めたあと上京、東京・麹町の斯文学でさらに漢学を修めた学者だった。

◇ だが「多年心血を注ぎし漢学は、今後の活社会に立ちて大活躍を試むにはあまりに迂遠」と明治19年、23歳の時に実業を志し、当時はまだ珍しかった潜水器を使っての漁業の研究を始める。「50年先を見ていた」(橋本)というアイディアマンだった。

事業は何度も頓挫したが中井はその度、旧家として知られた生家から資金をどんどん持ち出した。二女の飼牛ミツは「父の実家に帰ると、親族から石を投げられたこともあった。食事もたぐさした」と振り返っている。

中井が竹島を知ったのは、借金返済のため親族から借った大金も盗まれ、失意のうちに帰郷した30歳のころ。アシカが集まることを知るようになり、36年5月、初めて船を出す。手応えを感じると8月中旬には食料や飲料水のほか、作業小屋の資材を積み込んだ帆船を出した。荒波に一夜もまれてたどり着くと、平地を探して小屋を建て、飲料水を確保し、作業場所を設置した。日本の「足場」が刻まれた瞬間だった。

現在、竹島の実効支配を続けている韓国では、中井を「極悪人」の一人としている。それは、中井がこうして建てた作業小屋などのささやかな施設こそ、日本政府が「国際法上の『先占』の要件を満たす」と領土編入を決定する根拠になったからだ。当時無謀となじられた中井の足跡の意義は、実は計り知れないほど大きかった。

乱獲もあって捕獲頭数が減らつき、収支バランスは常に左右に振れた竹島経営。私財を使い果たして金策に奔走し、それでも竹島をあきらめない中井に、血気盛んな若い韓国人実効支配されてから半世紀。竹島での漁業経験者ら漁師さえ「中井のたんなさかん、なしてごなごせんとはみな高齢となった。彼らが見た竹島を改めて書き取るころから、竹島問題の根本を考えた。

◇ 「領海を大事にせんと、日本は立ち行かなくなる」その予言が真実になってい

竹島 島根県隠岐島の北西約160kmの日本海に位置する日本固有の領土。江戸時代初期の元和4(1618)年に伯耆(ほうぎ)藩の大谷、村川両家が幕府から豊後島を拝領して渡海免状を受けた。竹島は豊後島渡航の寄港地や漁労地として利用されていたことから、日本の領有権は遅くとも17世紀半ばに確立していた。日本は日露戦争中の明治38(1905)年に竹島を島根県に編入する閣議決定をしたが、韓国は戦後の昭和27年に「李承晩ライン」を一方的に引き、竹島の領有権を主張。同29年から竹島に警備隊を常駐させ、不法占拠を続けている。政府は「韓国の竹島占拠は国際法上何ら根拠がない」とし同年、国際司法裁判所への提訴を提案したが、韓国側は応じなかった。

(文中敬称略)